

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 224 載

カッコ悪い女性の歩き飲み

最近、目が点になるほどびっくりする光景に出くわすことがままある。

若い女性が、昼間からアルコールの缶を片手に歩いたり、電車に乗っていたりするのがそれだ。見た目はごく普通の女性たちのそんな行動に、老婆心ながらついあれこれと考えてしまう。

アルコールというのは、一日の仕事を終えてホッとしたり口にすると、自分へのささやかな労りのような存在であった。または、旅行や冠婚葬祭時などの非日常のアイテムでもある。女性男性に関わらず、明るいうちからアルコールを飲むというのはかなり特別なことだ

と思っていた。

女性たちが、昼間にアルコールを飲みつつワイワイおしゃべりをする。その光景の始まりはアメリカのテレビドラマ「セックス&ザ・シティ」の影響ではないかと、実はひそかに思っている。このドラマは、1998年から2004年にかけて放送され、世界中の女性たちから絶大な支持を得た番組である。ニューヨークを舞台に、フリーライターである主人公とその友人の計4人の、まさに男性との出会いや別れが赤裸々に描かれ、2度の映画化も果たしている。放送時期からかなりの時間は経っているものの、

アマゾンなどで観ることができると、リアルでは観ていなくても年齢を問わず女性たちの、いわばバイブルみたいな存在になっている。番組の中で、4人がシャンパンやワイン片手に楽しそうに打ち明け話をする、その光景は観る者にとっては



ツシヨナブルで可愛らしい。アルコールの缶を持つていても、一瞬違和感がないようにみえる。しかし、それが曲者で、アルコール依存の始まりは「朝から飲む」ことである。最初はそんなつもりがなくても、次第に感覚がマヒし、それが落ちて

は気持ちが悪くなっていく。入れ物がポップであつても、中身がアルコールであることに変わりない。アルコール依存症は立派な精神疾患であることを忘れてはならない。

衝撃的でありおしゃれでカッコよく映ったものだ。日本では、アルコールの種類が近年各段に増えている。缶のパッケージはカラフルでユニーク。かつて一升瓶を抱えて酒を飲む酔っ払いのオヤジの姿とは程遠く、今のアルコール類は軽くてファ

少し前まで、ビルの屋上のビアガーデンのオープン時には、必ずテレビカメラが入った。夕暮れのひととき、豪快に生ビールを傾ける姿は、夏の風物詩そのもの。喉を鳴らしてビールを飲む姿に初夏の訪れを実感した人も多いことだ

ろう。そこに、女性が登場するようになって久しい。女性が男性に負けず劣らずビアガーデンでビールをぐびぐび飲んでいく様子は、女性の社会進出を象徴しているかのようにも映って好ましかった。そのことと、昼間からアルコール缶を手にする若い女性とはまた別の話である。

「セックス&ザ・シティ」の女性たちは皆仕事をもち心身ともに自立していた。男性社会の中で挫折と成功を味わい、恥をかき、それでも前を向いて歩く姿に多くの女性が自分自身を投影していたのだ。

うわべの恰好だけ真似しても、それは似て非なるものに過ぎない。自由とマナーは別物であることとを自覚していない姿は、驚きとともにカッコ悪く見えてしまい、どうにも居心地がよろしくないものである。

イラスト・伊藤香澄